タクシー運転手
約束は海を越えて
（韓国 2017年）

一九八〇年五月、韓国・光州で市民による大規模な反政府蜂起が起こった。光州事件とよばれる。日本でもそれを支援する動きが広がり、私が入学したばかりの大学のキャンパスでもハンストが打たれたのをかすかに覚えている。それが本作品の主題になっている。というと、凄惨なシーンばかりではないか。そうした「期待」は映画の冒頭で見事に裏切られる。

主人公のソウルのタクシー運転手マンソプ（ソン・ガンホ）はまったく政治に関心がなく、市内の学生デモによる渋滞に日々うんざりさせられていた。商売にならず家賃も滞納する始末であった。そこに、光州事件を取材に来たドイツ人記者ピーター（トーマス・クレッチマン）から、光州往復で一〇万ウォンという儲け話が転がり込む。軍が制圧する光州には通行禁止時間が設定され、ピーターは現地入りを急いでいた。お調子者のマンソプはそれ飛びつき、英語もできないのにピーターを後部座席に乗せて一路光州を目指す。

ところが、マンソプのおんぼろタクシーは故障してその時間までに光州に辿り着けなかった。それでも翌日、ピーターの機転で軍の非常線を通過することができた。修理の際にナンバープレートを、「ソウル」では不審がられるからと「光州」と書かれた偽プレートに取り替えていたのも効いた。

光州市内は水を打ったように静かだった。しばらく進むとデモに行く学生たちを乗せたトラックに出くわす。彼らに誘導されて軍と対峙する最前線へとタクシーは向かう。それまでのコメディチックな場面展開から一転して、息をのむ軍による市民弾圧が迫力満点にスクリーンに映し出される。ピーターは命の危険も省みず、夢中でカメラを回し続ける。私服軍人がそれに気づき、二人を追いかけ回すがその日はどうにか逃げ切る。

次の大規模衝突で多くの市民が病院に担ぎ込まれた。二人が駆けつけると、現地で通訳を買って出てくれた学生の虐殺死体が横たわっていた。レンズを向ける気を失ったピーターにマンソプは、撮影して世界に発信しろと叱咤する。映画前半のお調子者ぶりからは想像できないマンソプの「成長」だ。

撮影を終えてソウルに戻る車内で、ピーターは助手席に座っている。二人の関係は運転手と客から同志に変わっていた。とはいえ光州脱出も容易ではない。地元の同業者から、マンソプは山中の抜け道を教えられた。だが、そこも軍が検問していた。二人は車から降ろされ、車内をチェックされる。隠したフィルムが見つかればアウトである。軍人は車のトランクも検める。覆いをめくると、取り替え前のソウルのナンバープレートがあった。一巻の終わりだと私が思った瞬間に、その軍人は部下に「通せ」と命じる。

この映画は事実を基にしたフィクションなので、こうした目こぼしが本当にあったのかはわからない。ただ、軍内には市民に銃口を向けることに反発していた勢力もいたのか。

二人は金浦空港で別れ、東京からピーターは光州事件の実情を全世界に暴露する。その後、ピーターはマンソプに再会しようと懸命に探すが、みつけ出せないまま他界してしまう。必見！

（四月二九日・シネマート新宿）

（にしかわ・しんいち／明治大学教授）